ホイットマンの海のイメジ

清水春雄

はしがき

Whitman の代表作品、と言うよりも寧ろその詩作のすべてと看做すべき *Leaves of Grass*「草の葉」は、1855年初版刊行から1892年に至る迄に約十版を重ねている。彼の晩年に於ける出版者 David McKay が、1900版の *Leaves of Grass* の序文に、"Perhaps no author was given more to change than Walt Whitman. Many poems or parts of poems have been either altered, or discarded for a time to appear in a new form in later editions, and not a few have disappeared entirely." と述べている通り、加除改訂など幾變遷かしているのであるが、前後約十版を通じ收められた詩篇は、四百餘に及んでいる。その歌うところは周知の如く、僚友愛に基く民主々義の理想と、彼獨自の超絶主義的な宗教觀を繰り返し說いていると見ることが出來る。從つてその中では、海とか山とかいう自然景觀は、叙事詩の背景として用いられていることもなく、又單なる叙景詩と見るべきものも殆どない。彼が何について歌うかと詩作の意圖を明かにしている初版の序文の中に於ても、また「回顧錄」 *A Backward Glance o'er Travel'd Roads* (1888年) に於ても、特に海をテーマとして歌うということについては一言も觸れていない。それにも拘らず海の image を含む詩が非常に多い。本稿はその屢々現われる海の image が、Whitman の詩の中に於て、どの樣な意義を持つているかを明かにしようとするものであつて、次の三項にわけて述べる。

I　詩形と海

II　自然の海

III　比喩の海

Ⅰは Whitman の抱く海の image が、彼の詩の形態に影響を與えたと考えられる点について、Ⅱは自然の海を彼がどの様に眺め、如何に理解していたかについて、Ⅲに於ては彼が海という語を比喩に用いた時、それは何を指しているかを示そうと試みたのである。なお詩文に譯を添えたものは大意を示す。

Ⅰ　詩形と海

Leaves of Grass の中に纏まつた海の image を含む詩が、どれほどあるかというに、前述の1900年 McKay編（これには Whitman の詩 398 篇が收められている）の中に54篇もあり、それは全詩の13%を超えている。海の imageを表わす語を、假りに sea, ocean, ship, sail に限つて、その中の一語でも含まれている詩を求めると 122 篇に達し、全詩の30%强にのぼる。上記四語を始め、海に關連ある語で10回以上用いられているものを拾つて見ると次の様になる。數字は回數を示す。

sea	175	beach	17	sail (v.)	56
ocean	32	bay	10	sail (n.)	19
wave	61	ship	117	voyage	18
tide	11	steamship	11	sailor	32
shore	83	boat	15		

其他 vessel, steamer, voyager 等々海並に海にゆかりの語の總數は 766 に及ぶ。この夥しい海の縁語の登場は殆ど無意識に筆にのぼるものと思わざるを得ない。

また考えて見るに、彼の思想と共にその獨特の詩形を以て、アメリカ文学の獨立を招來するに至つたと看做されている彼の詩形の亂雜さはどうであろう。英詩の傳統たる典雅な詩語、優美な韻律を棄てて、野蠻なまでに破格な無韻無律の詩を作つている。自らも"I sound my barbaric yawp over the roofs of the world." と *Song of Myself* にうたつているが、"Our highest themes are things at hand." (Furness : *Walt Whitman's Workshop*) と言

う彼に高雅な詩語を期待する事の出來ないのは當然である。各詩の長さは今あげた *Song of Myself* の如く、1,343行に亙るものもあれば *To Old Age* の如く只一行のもある。元來彼が Poe の短詩の意見に共感することは、「回顧錄」中の言葉（註1）からも知られるのであるが、十行以下の短い詩が201篇即ち全體の半數を占めている。

正規の metre に賴らぬ彼の詩の各一行の長さは實に氣紛れで、長いものになると *To Think of Time* IV 11の如く64語（註2）からなつているものがあり、他に40語50語にわたるものも少くない。de Sélincourt が「『草の葉』の各行は機械的な一致ではなく、內容の重さに一致がある」（B. de Sélincourt: *Whitman*）と辯護はしているものの、詩か散文か解らぬ趣がある。詩とは何ぞやと問いたくなる所であろうが、彼は「回顧錄」の中で之に答えるかの如くこう言つている。「私は詩とは如何なるものかと定義するような事は企てない。規定して見たところで、忽ち例外が出て引つくり返されるに定まつているから」と。

Rhyme した詩は二三あるのではあるが（註3）、それは例外と見るべきである。彼が描かんとする大自然の原理、整然たる宇宙の美の前にあつては、片々たる文学美等意に介するに足らずとして、詩の形態如何に煩はされようとしない（註4）。各節の不揃なのは、彼の所謂 Inner Light の輝く時、momentary flashes of inspiration を隨時あり合せの紙片、例えば受取つた手紙の封筒や便箋の裏、包紙など大小色とりどりの紙片に書き綴り、それを繼ぎ合せる習慣があつた事にもよるのであろう。Rhyme に依らぬが併し Anaphora（首句反復又は頭語重複）は極めて多く、頭韻を踏む詩形の一種と見てもよい程である。例えば *Apostroph* は65行からなる詩であるが、その中61行まで O で始まり、*Respondez* は68行の詩でその中59行が Let で始まる。*Song of Myself* XV には The の行が43行つづいて居り、*Song of the Broad Axe* III には同じく The が33行ある。*Salut au Monde!* の第III には I hear のつづく所が26行、第V. VI. に I see が26行、第XIには You が27行ある。其他同語十行以上反復の例は33例もあり、二三行或は五六行首句反復の例は枚擧に暇非ずで、

無韻の詩と稱するには疑問のある程である。彼の詩は realistic な自由詩の發展に寄與したものであるが、この anaphora を用いての Catalogue style は西歐象徵詩人の擡頭に拍車をかけたものとも考えられる。

このように行の初めの語、從つて音を合せて、而も行の長さの不揃なのは、恰も海邊において波の起るのを見ている場合、或所に來ると波頭がたつて岸に打寄せ、碎けて渚の砂に刻む波の跡の不揃な有樣を思はしめられる。以上は Whiman がその用語と詩形に於て、海の影響に從つたと思われる点を述べたのであるが、本來詩の形態なるものに意を用いはしなかつた彼である事を思えば、その影響と見られる点も彼自身に於ては或は全く氣づかなかつたものとも考えられる。小論に於ても詩形の問題は只一瞥を與えるだけに留める。

註1　But I was repaid in Poe's prose by the idea that (at any rate for our occasion, our day) there can be no such thing as a long poem.(*A Backward Glance o'er Travel'd Roads*)

註2　He was a good fellow, free-mouth'd, quick-temper'd not bad-looking, able to take his own part, witty, sensitive to a slight, ready with life or death for a friend, fond of women, gambled, ate hearty, drank hearty, had known what it was to be flush, grew low-spirited toward the last, sicken'd, was help'd by a contribution, died, aged forty-one years——and that was his funeral. (*To Think of Time*, iv 11)

註3　*Ethiopia Saluting The Colors* は a b b 五節, *Sailing the Mississippi at Midnight* は a b c b 七節, *The Singer in the Prison* 中の *The Hymn* は a a b b c c 四節からなる。

Rhyme の特例として、荒海にヒントを得たと思われる ing の繰り返しがある。例えば *Patroling Barnegat* は "Wild, wild the storm, and the sea high running, / Steady the roar of the gale, with incessant undertone muttering," で始まる14行の詩であるが各行とも ing で結ばれている。この樣な例は *Out of the Cradle Endlessly Rocking*, VIII に 13行, *Carol of Words* IX に6行あらわれている。

なお rhyme してはいないが形の整つたものとしては *Pioneers! O Pioneers!* を始め *Darest Thou Now, O Soul* ; *Eidolons* ; *Dirge for Two Veterans* 等を擧げることが出來る。

註4　Rhymes and rhymers pass away——poems distill'd from foreign poems pass away, (*As I Sat Alone by Blue Ontario's Shore*, xiii)

Did you ask dulcet rhymes from me? Did you seek the civilian's peaceful and languishing rhymes?

....

——— What to such as you, anyhow, such a poet as I?——therefore leave my works,

And go lull yourself with what you can understand——and with piano-tunes;

For I lull nobody——and you will never understand me. (*To a Certain Civilian*)

II 自然の海

人間を深く愛した Whitman は、自然をも深く愛した。萬物に等しく相通う魂を認める彼は、人と物とに差別をつけない様に、また物相互の間にも格別差等を設けなかつた。海も山も森も小川も、そして都会も村落も等しく彼が親しき呼びかけの對象となつた。併しその彼にも島に生れ海になじんで育つたという運命が、必然的に彼の心に海の揺籃の歌を深く刻みつけた。それが彼の生涯に亙つての生命のリズムになつている事は否定できない様に思われる。

彼は1819年5月31日 New York州 Long Island (West Hills) に生れた。彼が少年の頃からこの島の海邊をさまよい、天地の靈氣に浸り乍ら、或は波に合せて聲高く詩書を讀み、或は靜かに自然の聲に耳傾けて、詩魂を養う習慣のあつた事は彼自ら隨所に記して居る所である。

例えば Iliad の譯を初めて讀んだのも、Long Island の東北端にある Orient 岬の突端であつて、左右に海を控えた岩かげの砂地、彼の言葉に依れば「輝く太陽の下、波打ち寄せる海の大展望を前にした自然の中に身を置て」であつたと *Backward Reference* に述べている。また Shakespeare 劇のまとまつた本から *Richard II* の部分だけを切り取つてポケットに丸め込み Coney Island (紐育市の避暑地) の海邊に行つて讀み耽つた趣も記されている。(*Workshop*)

何故屢々海へ赴いたかについては *Leaves of Grass* の中でも、

With husky-haughty lips, O sea!

Where day and night I wend thy surf-beat shore,
Imaging to my sense thy varied strange suggestions,
(I see and plainly list thy talk and conference here,)

(*With Husky-Haughty Lips O Sea!*)

かすれ聲の唇を持つ海よ、
その小波寄せる岸邊へ、
晝となく夜となく私は通つた、
お前の樣々な不思議な暗示を感じとろうと思つて、
（今でも私にはお前の言葉がはつきり聞こえてよく判る）

とある通り、海の不思議な暗示を受ける爲である。この樣な彼の行動は、彼が海を好むと言うたか、或は言はなかつたか等の詮議だてを無用とするのであるが、念のため彼自身の證言を求めるならば、*Starting from Paumanok* が最初 *Proto-Leaf* として發表された時の第三、四行に次の樣にある。

Fond of fish-shape Paumanok, where I was born,
Fond of the sea —— ……
私の生れた島、魚の形をしたポーマノックが好きだ、
海が好きだ ——

Paumanok というのは Long Island を指す土人の呼び名であつて本來魚の意である。尤もこの詩は後に改訂されて

Starting from fish-shaped Paumanok, where I was born,
Well-begotten, and raised by a perfect mother;
After roaming many lands—lover of populous pavements;
Dweller in Mannahatta, my city —— ……
私の生れた島、魚の形をしたポーマノックを立ちいでて、
完全な母に育てられ、
多くの國々をさまよひ —— 人通りの多い鋪道を愛し、
わがマナハッタの住人となり —— ……

となつて、海を愛すという言葉は割愛されたが、改訂前が若い卒直な心を表わ

している。又彼は好んでマナハッタという語を用いたが、それはNew Yorkを指す土語である。彼はこの語が海に因むという理由で、好んで之を用いたのであつて、この語を題名とした詩が二篇ある。一つは1881年 *Sands at Seventy* 集の一篇として發表された三行のものである。

My city's fit and noble name resumed,
Choice aboriginal name, with marvellous beauty, meaning,
A rocky founded island —— shores where ever gaily dash the coming, going, hurring seawaves.

私の町に相應しい氣高い呼び名を再び用いる、
素晴しい昔名で床しい美しさがある。そしてその意味は
岩根固き島 —— 海の波の、とこしえに行きつ戻りつし、或は急ぎ足に寄せ來たる岸邊。

というので、マナハッタの語義を明かにしている。他のは1860年發表のもので

I was asking for something specific and perfect for my city,
Whereupon, lo! upsprang the aboriginal name!

私は私の町に恰好な完全な名を探し求めていた、
所がどうだ、あの昔名が飛び出して來た！

で始まる24行の New york 禮讃賦である。彼は愛する海港都市、その潮の干満、船の出入、繁華街に於ける人波の動きなどを、一つ自然の呼吸と見て、それと彼の生命との身近な連がりを感じさせられているのである。

海を好み、海邊へ屢々赴いた彼にとつては、海は類いなく不可思議なものとして彼の心を惹いたのである。恰も物活論の信奉者の如く萬物に魂を認める彼は、宇宙の凡てのものに無關心では居られなかつた。接するすべてが珍らしく彼の心を惹く。併しとりわけ海は何物にも勝つて珍らしい。

Every cubic inch of space is a miracle,
To me the sea is a continual miracle;
The fishes that swim—— the rocks —— the motion of the waves —— the ship, with men in them,

What stranger miracles are there?　(*Miracles*)

空間に所を占めるものは、どんな小さなものでも珍奇である、

私にとつては海は絶え間もなき奇蹟である。

泳ぐ魚、岩かげ、波の動き、船、人間を乗せた船、

こういう海より不思議な奇蹟が他にあろうか。

と歌つているが、それでは一體海のどういう所が彼の氣に入つたのであろうか。ここでは單なる景色、風光としての自然美は、直接には問題にならない。先に述べた通り海の與える暗示が彼の心を惹いたのであるが、然らばその暗示も海を如何なる角度から眺めて得られたかが問題である。

彼の詩を通じて先づ考えられる事は、客觀的な見方ではあるが海の靜動併せ秘めた潜在力である。*With Husky-Haughty Lips, O Sea!* で

Thy troops of white-maned races racing to the goal,

Thy ample, smiling face, dash'd with the sparkling dimples of the sun,

Thy brooding scowl and murk —— thy unloos'd hurricanes,

Thy unsubduedness, caprices, wilfulness;

海の姿、たて髪白く振り亂して　ゴールを競う駒の群、

輝く日射をかえすえくぼをたたえて、豊かに　にこやかな汝の顔、

嵐をはらんだ暗い顔、荒れ狂う暴風、

何ものにも制約されず、徹底的に氣紛れで我儘な汝。

怒りも慰めも自在の海、宇宙の種々相、大いなる苦悶、大いなる和らぎを共に持つ海、岸打つ波の永遠のリズム、海こそ宇宙の根元的な熱情を表わすと見て、彼はその海の熱情を、海に最も性情の似通つた自分に傳えて欲しいとの希いを以て、その詩を結んでいる。"The tale of cosmic elemental passion / Thou tellest to a kindred soul." また *A Font of Type* の中でも "These ocean waves arousable to fury and to death, / Or sooth'd to ease and sheeny sun and sleep," という句を用いているが、彼は激動と鎮靜の相反する要素を兼ねた潜在力に心を惹かれている。

次に彼の主觀的な見方としては、先づ波の起伏が與える暗示力がある。波の起伏が天然のリズムである事を覺つて、彼は詩の傳統に於けるmetre や rhyme を斥け、海のたくみとその香りを己が詩に移さんと希い求めている。*Had I the Choice* の中で Homer や Shakespere (sic), Tennyson 等の大詩人の名を擧げた後に

These, these, O sea, all these, I'd gladly barter,
Would you the undulation of one waves, its trick to me transfer,
And leave its oder there.

と大詩人達の作品よりも、海の起伏のリズムに教を受けんとしている。又起る波頭の一つ一つに過去の思い出を感じては、喜び事も旅も学びも、遠く過ぎた戰爭、若き日あてなく暮した自分の姿も、老齡の身も思い浮べては、そこから Ye multitudinous Ocean と海の多様性をたたえている。（*By that Long Scan of Waves*）

彼は又潮を自然の脈縛の表現として見、海の宏い同一性を宇宙の一切の現象への手掛りに解して

You tides with ceaseless swell! you power that does this work!
You unseen force, centripetal, centrifugal, through space's spread,
Rapport of sun, moon, earth, and all the constellations,
……
What central heart —— and you the pulse —— vivifies all? what boundless aggregate of all?
What subtle indirection and significance in you? what clue to all in you? what fluid, vast identity,
Holding the universe with all its parts as one —— as sailing in a ship?　（*You Tide with Ceaseless Swell*）

絶間なく搖れる潮よ、この働きをなす力。はてなき空間をわたる求心遠心の見えざる力、
太陽、月、地球、凡ゆる天體との緣に連がる潮よ……

萬有を生かす力が汝の胸に秘められている、汝の脈縛は一切の凝集。

捕えがたきたくみを持つ汝、宇宙の一切を解く鍵は汝のうちにある、流動的で廣大な同一性、

恰も船の航海の様に、その一切の現象を一つに凝めて宇宙を握つている潮よ。

と歌い

On the beach at night alone,

As the old mother sways her to and fro, singing her husky song,

As I watch the bright stars shining —— I think a thought of the clef of the universes, and of the future.

A vast similitude interlocks all, ……

(*On the Beach at Night Alone*)

ひとり夜の濱邊に、

母なる海のゆらぎやまず、かすれ聲の歌うたう時、

輝く星をみつめながら私は思う、數しれぬ宇宙を結ぶ記號未來を結ぶ記號を。

それは一切をつなぐ巨大な相似だ……

とも歌つている。これは海だけを對象としているのではないが、海のゆらぎを聞きつつ覺つた時空を貫き天地にゆき亙つている巨大な同一性の觀念を表はし、この同一性のさとりは彼をして生前死後の無差別觀へと導いている。彼は潮の干滿に神秘な人間的意味を見出して "Of you O tides the mystic human meaning; / Only by law of you, your swell and ebb," (*Then Last of All*) とただ潮の掟、潮のみちひきに自分の考えも、我が歌う聲も從はしめると歌つているが、先づ退き潮の渦が奏づる潮騷は、現世の悲しみや不平を葬る曲と見る。名の知られぬ詩人、すばらしい構想を胸に抱きつつ生涯埋れていた畫家、容れられない戀、幾世代もの不平のコーラス、希望の最後の言葉、自殺者の絶望の叫び、このすべてを二度と歸らぬ様に涯なき海原に葬れ、一切を忘却の淵へ葬れ、それが退き潮お前の役目であると言つている。

On to oblivion then,

On, on, and do your part, ye burying, ebbing tide.

(*Last of Ebb and Day Light Waning*)

Whitman にとつては、退き潮はすべてを葬り去る死を意味するとしても、それは退いたるままに還らぬ永遠の死を表わすものではなく、やがて時來りなば恰も蝶番の廻轉するが如く、潮は歸り寄せて來る。彼は退き潮や睡眠や夜や死それ自體から、永遠の誕生のリズムが織り出されていると感じて居るのである。

Duly by you, from you, the tide and light again —— duly the hinges turning,

Duly the needed discord-parts offsetting, blending,

Weaving from you, from Sleep, Night, Death itself,

The rhythmus of Birth eternal.

(*And Yet Not You Alone*)

確かに退き潮お前から、新たな潮と光とがさして來る —— 確かに蝶番が廻るのだ、

確かに治さねばならぬ不調和な箇所を補い繕つて、

お前から、眠、夜、死自體から

永遠の誕生のリズムが織り出される。

かくの如く彼は潮の干滿に、死から生への轉換を見、それは永遠の生命のリズムであると感得している。蘇る生命は活氣に滿ちているとして次の樣に歌う。

Proudly the flood comes in, shouting, foaming, advancing,

.....

Mainsails, topsails, jibs, appear in the offing —— steamer's pennants, smoke —— and under the forenoon sun,

Freighted with human lives,

(*Proudly the Flood Comes In*)

潮は叫び泡だち誇らしげに突進して來る、

沖はるか眞帆片帆とりどりの帆が見える、

汽船の旗も煙も —— 朝日のもとに、

多くの人間を乘せた數知れぬ船を浮べて……

この樣に潮の動きに生命を感じているが、更に海を全體的に眺めては

Sea of stretch'd ground-swells!

Sea breathing broad and convulsive breaths!

Sea of the brine of life! Sea of unshovell'd yet always —— ready graves!

Howler and scooper of storms! capricious and dainty sea!

I am integral with you —— I too am of one phase and of all phases.　　(*Walt Whitman* XXII)

はてなく擴がるうねりの海、

宏く深く强い呼吸をする海、

生命の鹽水の海、掘らずとも常に備えある墓たる海、

嵐を起こし又鎭めもする海、氣紛れで陽氣な海、

私はお前によく似ている —— 私もお前の樣に一即一切の姿をもつている。

と海の一即多の樣相が彼の心を惹いている。こういう神秘な海であるから彼は海に呼びかけて歌う。

You sea, I resign myself to you also —— I guess what you mean;

We must have a turn together —— I undress —— hurry me out of sight of the land,

Cushion me soft, rock me in billowing drouse,

Dash me with amorous wet —— I can repay you.　　(ibid.)

私はお前に身を委ねたい —— そしてお前の心をさぐりたい。

私はお前の懷に飛び込んでゆく —— さあ裸になつた —— 波よ陸の見えぬ所へ運んでくれ、

お前の柔かな蒲團に寢かせて、

波の枕で搖つてくれ、

愛のしめりで潤してくれ —— 私もお前に報いることが出來よう。

Whitman は海の諸相を兼ね備えたものとして自己を見ることが多いのであるが、時には謙虛な氣持で、こう歌うこともある。

As the ocean so mysterious rolls toward me closer and closer,

I, too, but signify, at the utmost, a little wash'd-up drift,

A few sands and dead leaves to gather,

Gather, and merge myself as part of the sands and drift.

(*Elemental Drifts* II)

神秘な海が私に迫つて來る時、

私はその大海の前にはただ一かけの漂着物にすぎない、

海邊の少しの砂や枯葉を集めて、

砂や漂着物の中に吾が身をとけこましめよう。

と己れを一片の吹き寄せものとみて、海の呼吸をとり込む事を願つている。彼は海邊を歩いて渚に流れ寄つた屑物を見て、これらの屑物が私に印象を與える樣に、私も他人に感銘を與えたいと願つている。"Elemental drifts! / How I wish I could impress others as you have just been impressing me!" (ibid) 尤もこの as you have just been の you は drifts を指すが改訂前の1860年の作には as you and waves have just been と波の語を明かに出していた。

これ迄述べた所は、Whitman が自然の海から如何なる暗示を受けたかを中心に見たのであるが、この樣に眺めた海はもとより彼が用いた夥しい自然の海の一部であつて、今その全貌を明かにすれば次の如くになる。（數字は sea及 ocean の使用回數、總回數 155）

自然の海
- 場
  - 總稱……(A)…19
  - 單稱
    - 特定……(B)…36
    - 不定……(C)…49
- 力
  - 總稱……(D)…19
  - 單稱
    - 外形的……(E)…10
    - 暗示的……(F)…22

從來述べ來つた所は、この表の(F)項の說明に當る。その他の項目については特殊の解釋を必要としないので簡單に說明したい。

(A)〔場——總稱〕 これは靜的に平面的に、地理上の位置として考えられた海ではあるが、單に海のみを指しているのではなく、海も陸もいたる所、即ち場所は何處に於てもの意に用いられているものである。from sea to sea の如く sea のみを用いる場合もあるが、多くは land and sea 或はその逆に列べられている。

His daring foot is on land and sea every-where —— he colonize the Pacific, the archipelagoes;

(*Years of the Modern*)

Discarding peace over all the sea and land,

(*Song of the Banner at Day Break*)

Ay through the world —— urged by these songs,
Sailing henceforce to every land —— to every sea,

(*On Journeys Through the States*)

(B)〔場—單稱—特定〕 これは固有名詞であるか或は方位が明示されていて、その位置が確定している場合である。The Western Sea が最も多く 9 例、Eastern Sea 4例, Mexican Sea 4例 等が之に次ぐ。

Always the vast slope drain'd by the Southern Sea——inseparable with the slopes drain'd by the Eastern and Western Sea,

(*American Feulillage*)

Chants of the long-running Mississippi, and down to the Mexican sea;　　(*Starting from Paumanok*)

Over the western sea, hither from Niphon come,

(*A Broadway Pageant*)

(C)〔場—單稱—不定〕 特定の海ではなく、何所の海であつても構わぬもので單なる所在を示す場合が最も多く38例あり、航海中という句をなすものが5例含まれている。

Forests at the bottom of the sea,

(*The World Below the Brine*)

O brown halo in the sky, near the moon, drooping upon the sea!

O troubled reflection in the sea!

(*Out of the Cradle Endlesslay Rocking*)

I see ships foundering at sea —— I behold on deck, and below deck the terrible bableaux,

(*The Mystic Trumpeter*)

(D)〔力—總稱〕 これは動的に海を力の面から見ているのであつて位置は問題にならない。場の總稱と同じく、陸地と併記されている場合が多く、普く天地の力、自然力の意に解すべきもので、海の力のみを考えているのではない。

I am he that walks with the tender and growing night;

I call to earth and sea, half-held by the night,

(*Walt Whitman*)

Thou born to match the gale (thou art all wings)

To cope with heaven and earth and sea and hurricane

(*To the Man-of-War-bird*)

Now we go forth to receive what the earth and the sea never gave us;

(*Rise, O Day, from Your Fathomless Deep*)

(E)〔力—單稱—外形的〕 ここでは海の動き、殊に音を伴う海自體の動きが客觀的に捉えられている，海の穩かな波のリズムや、嵐の海の咆吼も表われる

が、直ちに暗示力と結びつけて受取られない場合である。

Manhattern steamboats and clippers, taking the measure of all seas　　(*Song of the Broad Axe*)

Over the hoarse surging of the sea,
Or flitting from brier by day,
I saw, I heard……
(*Out of the Cradle Endlessly Rocking*)

Enjoyers of calms of seas and storms of seas,
Sailors of many a ship; walkers of many a mile of land,
(*Song of the Open Road*)

Ⅲ 比喩の海

以上は自然の海を Whitman が如何に感じているかを論じたのであるが、次に彼が海という語を比喩として用いた場合、それは何を指しているかという點を述べようと思う。もとより海そのものを上述の如く理解している限り、海を比喩として用いる場合も以上の見方を離れた見解はあり得ない。

自然の海の解釋に於て、海の動きに生死を感ずる點が一番目立つて居るが、比喩の場合も海をいのちの海と見たてている場合が最も多いのである。いのちの海以外にも下表の如く色々な場合が見られるがそれらの數は少ない。比喩の例は52例で、その中直喩は4例、他は隱喩である。直喩は特に說明を要しないのでここでは觸れない。（數字は sea 及 ocean の使用回數）

- 比喩の海
  - いのちの海
    - 統一の海…… 4
    - 生の海……19
    - 死の海…… 5
  - 思想の海…… 6
  - 時の海…… 3
  - 詩の海…… 1
  - 其の他……10

（1） いのちの海。　彼に於ていのちの海とは、魂の航海する場である。彼

の詩の多くに "My Soul and I" とか "Come, said my Soul" など言つて、「自己と自己の魂との二人連れで」という句が屢々現われる。この自己の魂は彼の超絶主義的宗教哲学の立場から見ての absolute being であり、宇宙に遍在する魂の一部である。彼の詩は自己の叫びとこの absolute being の叫びとの交錯である場合が度々あつて、それが彼の詩の解釋を困難ならしめていることは、夙に William S.Kennedy が *The Fight of a Book for the World* に於て指適している通りである。

この己れも他人もその他萬有の背負つている魂、その魂の航海する場として考えられたものが、彼の所謂いのちの海である。魂は旅する、それは何の爲に、そして何所に向つてであろうか。*Song of the Open Road* に

The Soul travels;

The body does not travel as much as the soul;

The body has just as great a work as the soul, and parts away at last for the journeys of the soul.

魂は旅する、

肉體は魂程には旅をしない、

肉體は魂に劣らぬ程の偉大な仕事をするが、結局は魂の旅の爲に別れねばならぬ。

Of the progress of the souls of men and women along the grand roads of universes, all other progress is the needed emblem and sustenance.……

They go! they go! I know that they go, but I know not where they go;

But I know that they go toward the best —— toward something great.

宇宙の大道をゆく男女の魂の行進、

これに比ぶれば他のすべての行進は、それに對しての必要な飾りと支えにすぎない。

魂は行く、魂は行く、

私はそれらがどこへ行くかは知らぬ、

しかしそれらが最善へ向つて ―― 何か偉大なものへ向つて進んでいることを私は知つている。

とあるが、この「大道の歌」の大道は自由、健全、友愛などの「最善」につづいて延びて居るのである。更に最善への考えを見れば

I do not know what follows the death of my life,

But I know well that whatever it is, it is best for me,

And I know well that whatever is really Me shall live just as much as before.

(*On the Beach at Night Alone*)

私の死後に何がつづくかしらぬ、

併し何が來ようとそれは私にとつて最善のものであると知つている、

ほんとうの私が以前のとおりに殘されていることを私はよく知つている。

にも現われ、又この思想を「草の葉」以外に求むれば

Finale ―― state, in a strong manner that …… I can settle nothing ―― that we are sailing a great sea blown hither and thither and know not our own destination ―― only this…… that, whatever it is I, full of confidence, full of joy, know that it is good for me, and that it is divine and great. (*Three Lectures on Religion* ―― Furness : *Workshop*) 「結びとして次のことを強調しておこう ―― 私はただ心を目覺ますだけで何ものをも解決する事が出來ない。私達は風のまにまに吹き寄せられながら大海をわたつているのであつて、何が目的かは知らない。だが確かに解つている事は、そして實に嬉しいことだが、その目指す先が何であろうと、それは私にとつては善で神聖で偉大であることだ。」

とこの講演の原稿に於ても、われらは海に漂うが目指す所は善であると說いて

いる。

さて魂の旅する場として屢々海という語が登場するのであるが、その意味の海も三つに分けて考える事が出來る。一は生と死の双方に連る場合、二は魂が肉體に囚われている間で、即ち生の海、三は肉體を離れた場合、即ち死の海である。

先づ第一に生死を兼ねた場合、假りに之を統一の海と名付けて置こう。統一の海は Whitman に於ては、永遠の海、神秘の海という表現をとつている。この海では生と死は一ついのちの兩面にすぎない。生死を永遠に繰返し、生の契機と死の契機を内に兼ね具えて、この双方を統合したものとして考えられている。例えば *Two Rivulets* に見る様に

Two Rivulets side by side,
Two blended, parallel, strolling tides,
Companions, travelers, gossiping as they journey.
For the Eternal Ocean bound,
These ripples, passing surges, streams of Death and Life.

二すじの小川が相並んで、
時に交はり、時に平行して流れている、
道連れ、旅人、旅しながら語らつてゆく。
永遠の海に向つて、
この小波大波騒ぎやまぬ生と死の流れが。

と生死の流れが Eternal Ocean に向つて注ぐ趣を歌つている。この海ではただ生死のみならず、客觀と主觀、現實と理想など相反する流れが、或は交り或は平列しつつ結局一つの海の廣い胸にいだかれるのである。

All, all, toward the mystic Ocean tending.
(O yearnful waves! the kisses of your lips!
Your breast so broad, with open arms, O firm, expanded shore!)
(ibid.)

凡てはすべては神秘の海に向つて、

（おお憧れの海よ、汝の口づけよ、

その廣き胸、擴げられたる腕、おお堅く廣き岸邊よ。）

この様に生死の繰り返しと統合、そして最善への道という觀念は、彼がHegel 哲学と Darwinismの信奉者たる一面を明かにしているのである。彼が"I make the poem of evil also——"(*Starting from Paumanok* VII) と善悪共にこれを肯定し、彼獨自の宗教によつて、より高い立場から之を統一している態度が點かれるであろう。

第二に生の海の考えに入りたい。*Aboard, at a Ship's Helm* に於て、若い舵手に對し警鐘に注意しつつ船を進めよという自然の海の航海の話から、轉じて魂の航海を想い

But O the ship, the immortal ship!

O ship aboard the ship!

O ship of the body——ship of the souls——voyaging, voyaging, voyaging.

だが、おお船よ、不滅の船よ、

船の上なる船よ、

おお肉體の船よ ——魂の船よ ——走る、走る、走る。

と人生のコースを辿る肉體、その肉體に籠る魂の船旅を想つている。*After the Sea-Ship* では "The wake of the Sea-Ship, after she passes——flashing and frolicsome, under the sun, / A motley procession, with many a fleck of foam, and many fragments, / Following the stately and rapid Ship——in the wake following." と堂々と而もすばやく海走る船の跡に、それを慕つて波は躍り泡沫や海屑が追いすがる様に走るとあり、之は生命の流れに出会う經驗の種々相を歌つたものであろう。人生の色々な經驗を乘り超えて魂の船がすすむ姿を描いたものであるが、*The Ship Starting* も

Lo! The unbounded Sea!

On its breast a Ship starting spreading all her sails——an ample Ship, carrying even her moonsails,

The pennant is flying aloft, as she speeds, she speeds so stately
—— below, emulous waves press forward,
They surround the Ship, with shining curving motions, and foam.

見よ、はてしなき海原、
その胸に、凡ての帆をひろげて乗り出す船、大いなる船、月帆までもひろげて走る、
旗高くひるがえり船は迅く堂々と走る —— 下に波は競い進み、
うねり輝き泡だつて船を取りまく。

と、はてなき海を、順風に帆をはらみ旗なびかせて堂々と進む船を畫いているが、もとより單なる叙景ではなく、船は魂を表わしている。

また彼が住んでいた Camden の Public School の落成式に臨んで祝辭として咏んだ *An Old Man's Thought of School* では、生徒の輝く瞳、若き命に呼びかけて "Immortal ship! / Soon to sail out over the measureless seas, / On the Soul's voyage." と魂の航海に旅立たんとする者の自重を促がし、学校も單なる校舎が学校ではないことは、丁度教会も單なる建物に在るのではないのと同様であるとして Quaker の始祖 George Fox の言葉 "Why this is not the church at all —— the church is living, ever living Souls." を引き合に出して說いている。或は航海に惱む者に Pilot を提供せんと

Here, sailor! Here ship! take aboard the most perfect pilot,
Whom, in a little boat, putting off, and rowing, I, hailing you,
offer. (*Here, Sailor*)

さあ船人よ、船よ、
最も完全なパイロットを乗せ給え、
今ボートに乗つて漕いでゆくそのパイロットを、
私は君に敬意を表して提供しよう。

と申出て居るが、之も自己の魂への眼を開かしめんとしているのである。又 *Twenty Years* に於て、砂地に腰を卸し二十年にわたる航海を終えて港に歸り

ついた船人の回顧談を聞く形のものも、もとより人生航海を意味している。

第三に死の海の考えは如何であろうか。自然の海が死を暗示する事は前にも述べたのであるが、Lincoln の死を悼む *When Lilac Last in the Door-Yard Bloom'd* の *Death Carol* では次の様に歌つている。

Approach, strong Deliveress!
When it is so —— When thou hast taken them, I joyously sing the dead,
Lost in the loving floating ocean of thee,
Laved in the flood of thy bliss, O Death.

近づけ強き救い手よ、
その時が來た時 —— 汝が彼等を捉えた時、私は喜んで死者を歌う、
やさしく浮べる大海につつまれて、
汝の溢れる幸福に浸つているのを、おお死よ。

The night, in silence, under many a star;
The ocean shore, and the husky whispering wave, whose voice I know;
And the soul turning to thee, O vast and well-veil'd Death,
And the body gratefully nestling close to thee.

星あまた輝き靜かな夜、
大海の岸邊、わが聞き知れる嗄れ聲の波の囁き、
魂は汝 —— おお姿ひそめて大いなる死よ　汝に向い、
肉體は汝のそば近く心地よげに憩う。

海のささやきに死を聞き、死を禮讃しているが、死は偉大なる解放者、強き救い手であり、新たな生へと蘇らすものであるが故に、喜んで死の海に身を漂わさんと歌い、*Out of the Cradle Endlessly Rocking* の中でも、海のささやきが死を教えているが、彼はこの死の悟りから自分の歌が生れた、わが歌の基調は、この海の教えた死にあると極言している。

Are you whispering it, and have been all the time, you sea-waves?

Is that it from your liquid rims and wet sands?

Whereto answering, the sea,……

Lisp'd to me the low and delicious word DEATH ;

海の波よ　お前がそれを囁いているのか、

今まで、づつと囁いていたのか。

お前の水際、濡れた砂濱からか。

これに答えて海は言う……

わが耳に低く　優しく一言、死と。

Poems of Joy に於ても、煩はしい肉體を離れた死の旅 (the voyage of Death) は樂しからずや、眞のからだは私に殘されて他界に旅し、私の用濟の空虛なからだは、淨めに歸り永久に地を肥やす糧となると歌う。

O Death! the voyage of Death!

The beautiful touch of Death, soothing and benumbing a few moments, for reasons ;……

My real body doubtless left to me for other spheres,

My voided body, nothing more to me, returning to the purifications, further offices, eternal uses of the earth.

(*Poems of Joy* XVII)

この現實の煩はしさを脱れんという氣持は、更に同詩 XVII に "O, sail to sea in a ship! / To leave this steady, unendurable land!" という言葉となつて、陸を離れた船の自由をたたえている。これと同じ考えは *Now Finale to the Shore* 並に *The Untold Want* に於ても「岸よ陸よ生よさらば、はてしなきいのちの海の航海へ、地上で得られぬ魂の究明に進まん」とあり、又 *Joy Shipmate Joy!* では

Our life is closed —— our life begins;

The long, long anchorage we leave,

「私たちの生涯は終はり、私たちの生涯は始まる。永い碇泊を去り」船は岸を離れ躍進する、喜べ船の友よ喜べと歌い、陸地を離れてこそ眞のいのちが開か

れると死に於て束縛を逃れた新生を壽いでいる。*To Old Age* と題する一行詩では

I see in you the estury that enlarges and spreads itself as it pours in the great sea.

私は思う、お前は河口だ、次第に擴まり渺茫たる大海に注ぐ河口だと、老齢を大海にそそぐ河口に見立てているが、この海は勿論、死の面をおもてにしたいのちの海で、個我の魂を運んだ生の流れが生涯の旅を終つて、將に大靈を荷ういのちの海に歸り注ぐ喜ばしき瞬間であると、老齢を讃えているのである。

海は單なる死や憩の海ではなく、彼にあつては假令死の海という言葉を用いても、それは消滅絶滅の意ではなく、あくまでも生への復活を豫想するいのちの海を意味している。彼の死觀を明かにする句を求むれば、「自己の歌」の中に生死一如の見解が歌はれ、"No doubt I have died myself ten thousand times before." とあり、*O Living Always —— Always Dying!* の中で、刻々の死に依つて刻々に生きる己の姿を描いている點や、また死に不滅の誕生を見る *Whispers of Heavenly Death* や、生は耕作、死は收獲と歌う *As I Watch the Ploughman Ploughing* も同じ考えに出ている。更に *To Think of Time* II に於て、生き續ける眞のいのちが、いま脱け出した己れの亡骸を物珍らしげにうち眺めている有様、そしてその XI の冒頭にある "I swear I think now that everything without exception has an eternal Soul!" の句が、彼の死觀を決定するものと見るべきであろう。この萬象に尊嚴を認め、生死の變遷をもこめて、一切の現象に内在する魂の永遠性に對する强い信仰は、彼の樂天的な宗教觀を形ちづくつている。即ち彼にとつて個人の死は、全宇宙のいのちという絶對的な立場から見るならば、それは死滅ではなく永遠にのびゆくいのちの一過程である，死は全體の成長と見て、死もまたいのちの一位相であると見ているのである。この様な何れかと云へば東洋的な生命觀—小我の死と大我の成長との關係に見る如き考え方——は、印度哲学に理解の深かつた Emerson の影響を多分に受けている爲であると考えられる。

以上は Whitman のいのちの海の解釋であつて、生と死並にその統合の場合と三つの海を見たのであるが、生といい死というも結局は一つであり、一口に言えば個人のいのちに囚われぬ超個人的な魂を船と見立てて、その船の航海する場としていのちの海、いのち一般とも考えられるいのちの海を彼は考えていると思はれるのである。

彼の海による比喩的説明は、いのちの海以外に種々あることは前述した通りである。その中で、詩の海は直接海という語を用いることは少いが、船或は航海という語によつて、海の image が判然と浮き出される場合が比較的多いのでこれを次に述べ、其他の海は一括して説明したい。

（2） 詩の海， Whitman は國民が自由平等の基礎の上に立ち、而も彼の所謂 Athletic love「大愛」のきづなによつて固く結ばれてこそ、強力な國家が築き上げられるとの信念を説く愛國詩人であるが、同時に外に向つては祖國アメリカとそのデモクラシイが正しく理解されることを希つてやまなかつた。*To Foreign Lands* に於て "I heard that you ask'd for something to prove this puzzle, the New World, / And to define America, her athletic Democracy; / Therefore I send you my poems, that you behold in them what you wanted." と新大陸を紹介する態度で筆をとつた。彼はアメリカのあるがままの姿を描こうとした。Frontier Spirit の旺溢した新大陸に、宮廷文学の殘滓たる歐州舊文藝の移植は無意味であると覺り、平凡にして而も現在的な日常茶飯事の中に美或は眞を見出してこそ、新大陸獨自の文化が打建てられると信じた。ここから *Starting from Paumanok* の次の言葉が生れた。

A new race, dominating previous ones, and grander far —— with new contests,

New politics, new literatures and religions, new inventions and arts.

These! my voice announcing —— I will sleep no more, but arise;

You oceans that have been calm within me! how I feel you,

fathomless, stirring, preparing unprecedented waves and storms.

新しき民族、先立つものより遙かに優れて偉大なる民族、新しき競いをもつ、

新しき政治、新しき文学宗教、新しき發明藝術。

これ等を私の聲は歌う —— 私はもう眠らず起ち上る。

私の胸の中で靜かに眠つていた大洋よ、何と私はお前を感ずることか、底知れず動めき、嘗てない波や嵐を起さんと備えているお前を。

ここでは海は彼の心、即ち新詩の想いである。この心の展開されたものが彼の詩である所から、彼が己の詩を海と見、そこを舞台とするすべての動きに、諸々の詩材を象徴させている趣は容易に察せられるであろう。

See! steamers steaming through my poems!

See, in my poems immigrants continually coming and landing;

See, in arriere, the wigmen, the trail, the hunter's hut, the flat-boat, the maize-leaf, the claim, the rude fence, and the backwoods village,

See, on the one side the Western Sea, and the other the Eastern Sea, how they advanced and retreat upon my poems, as upon their own shores.

この様な See で始まる12行と最後の Hear で始まる1行とには、彼の詩の海に浮く種々相が恰も Catalogue の如く羅列されている。農場、都市、汽車、電信、鑛夫、大統領等々。彼はこれより一歩轉じて、己れ自身を船人に見立て

To be a sailor of the world, bound for all ports;

A ship itself, (see indeed these sails I spread to the sun and air.)

A swift and swelling ship, full of rich words —— full of joys.

(*Poems of Joy* VIX)

船乘となつて世のすべての港々に立寄ろう、

(私が大空にかかげるこれらの帆を見よ)

豊かな言葉と喜びに満ちて、すばやく走る船よ。

と、ここでは船は彼の詩であり、その船が廣く世間を航海すると見ている。*Poems of Joy* には前に記した通りその第Xに、死の航海もまた樂しとあり、第XVIIIの "O to sail to sea in a ship!" は一應魂の航海を意味すると解したのであるが、それに續く

To leave the tiresome sameness of the streets, the sidewalks and the houses;

To leave you, O you solid motionless land, and entering ship.

To sail and sail, and sail!

どこへ行つても同じ様なあきあきする町並や、しき石みち、

そんな所、固い動きのない陸地などは離れ去つて、船に乘り込むのだ、

そして帆走るのだ、帆走るのだ。

という詩句は、肉體を離れた魂の自由な旅を歌うと同時に、これは舊慣にとらわれた因襲的な英詩の傳統を離れて自由詩を歌はんとの意氣を示したものとも考えられる。tiresome sameness of the streets という句は、日常のroutine work とも、詩の正規な metre, rhyme を指しているとも考えられる。尤もこのような二様の解釋を攜めると前に述べた *After the Sea-ship* も *The Ship Starting* も新詩の船出を讃えているとも解する事が出來よう。この兩様の解釋が成り立つのには理由がある。というのは Whitman にとつて死の航海は魂一般の旅であり、詩の航海は彼なる個人に宿る魂の航海であるからである。*Leaves of Grass* は彼の一生に亙る魂の記錄であるが、その記錄は死の悟りから生れているとは彼の屢々語る所である。*Out of the Cradle Endlessly Rocking* の中で、「海に暗示を求めて、波の囁きに得た答は死である」と云つていることは前に記したが、彼は良き歌の key は死であるとして、"My own songs, awaked from that hour." と述べている。即ち囚はれぬ魂の自由を謳う點に於て、詩の航海も死の航海と同じ考えに基いているのである。

わが詩そのものを海と見る場合と、わが詩は船であると見る場合と、以上二つの譬えが一の詩に纏められているものがある。その詩は *In Cabined Ship*

at Sea で、八行三節からなつている。第一節では、わが歌は魂の航海の歌であるから、海をゆく大小の船舶の乘組員たちによつて、わが眞意が理解されるであろうとの期待を示し、第二節はわが歌を讀んで、ここにわれ等船乘りの心を表わす歌があると欣ぶ船員の歡喜を描いて

Here are our thoughts —— voyager's thoughts,
Here not the land, firm land, alone appears, may then by them be said;
The sky o'erarches here —— we feel the undulating deck beneath our feet,
We feel the long pulsation —— ebb and flow of endless motion;
The tones of unseen mystery —— the vague and vast suggestions of the briny world —— the liquid -flowing syllables,
The perfume, the faint creaking of the cordage, the melancholy rhythm,
The boundless vista, and the horizon far and dim, are all here,
And this is Ocean's poem.

おおこれぞわれら海ゆくものの心を表わした歌、
ここにはただ陸地、固い陸地が見えるのでない —— と彼等は言うだろう ——
弧を畫く大空、足もとに波のゆらぎが感ぜられる、
みちひく潮の永い脈搏、
見られぬ神秘の調べ —— 青海原の茫漠たる暗示 —— よどみなく流れてやまぬ言葉の海、
帆づなのきしみ、悲哀のリズム、
はてしなき眺望、遠くかすむ水平線、
このすべてが此處にこめられている、
これぞこれ大洋の歌.

と叫んでいる。voyager は勿論人生の旅をする人々を指す。Whitman は己の

詩を海の偉大さに比べているのであるが、更に自己の詩、新しい詩の發足を船出と見て、その第三節に

Then falter not, O book! fulfil your destiny!
Consort to every ship that sails —— sail you!
Bear forth to them, folded, my love —— (Dear mariners! for you I fold it here, in every leaf;)
Speed on, my Book! spread your white sails, my little bark, athwart the imperious waves!
Chant on —— sail on —— bear o'er the boundless blue, from me, to every shore,
This song for mariners and all their ships.

たじろぐな、わが詩書よ、汝の運命を果せ、
海ゆくすべての船を守つて、つき添い走れ、
彼等にわが愛を運べ ——(いとしき船人達よ、この詩書のどのページにもわが愛をこめて贈る。)
迅く走れ、わが詩のふみよ、わが小船よ、白帆を擴げ、大海を横ぎれ、
歌えよ、走れよ、はてなき青海原を、いづこの國へもわが歌のせて、
船人たちと、すべての船におくるこの歌を。

と歌つて、わが歌本が人生の海を旅する凡ての人の伴侶とならん事を希いつつ、古い詩の傳統をたちきつて新しい詩の實踐に乘り出した自らを勵ましているが、この場合も海の譬えに賴つているのである。

（3）其の他。イ、思想の海，Passage to India は、スエズ運河の開鑿や太平洋鐵道の開通によつて地理的なコースが急激に拓けた所から、精神的な東西往來の可能性を思つているのであるが、彼は東洋的なものの考え方に共鳴して、その觀點から神や靈魂の問題を取扱つている。その中では自己の魂が書籍に囚はれている心から離れて、原始の直感へ還らねばならぬと歌う。

Passage indeed, O soul, to primal thought!……
O soul, repressless, I with thee, and thou with me,

My circumnavigation of the world begin;

Of man, the voyage of his minds return,

To reason's early paradise,

Back, back to wisdom's birth, to innocent intuitions again with fair Creation, ……

Away, O soul! hoist instantly the anchor! ……

Have we not darken'd and dazed ourselves with books long enough?

Sail forth! steer for the deep waters only!

と過去の因襲舊套の象徴たる書物に囚はれた心を去り、神の叡智に立ち還るために、魂よ錨を拔け、未だ嘗つてどの船人も敢て行かなかつた世界へ行こうと歌う時、その海は思想の海と考えられる。また *Carol of Words* 中にある "The divine ship sails the divine sea." の聖なる海や、*As a Strong Bird on Pinions Free* の中の "Sail —— sail thy best, ship of Democracy! に窺い得る海も、思想の海と見る事が出來る。

ロ、時の海。 Whitman が時を如何に見ているかは *Darest Thou Now* の中に

Darest thou now, O Soul,

Walk out with me toward the Unknown Region, ……、

Till, when the ties loosen,

All but the ties etrnal, Time and Space.

とあり、"We float, in Time and Space" と述べている所からも判る通り、魂の完全自由を想う彼にとつては、Time と Space はその自由への最後の或は唯一の制約であるが、ここでも Time は Soul の漂う場即ち海として考えられている。また *As Consequent, etc.* には

Or from the sea of Time, collecting vasting all, I bring,

A windrow-drift of weeds and shells,

とあり、生死の流を經過の面に於て說いたもので、刻々のいのちの歩みを指

し、そのいのちの海の渚に寄せる雑物、即ち人生の種々相の一こま一こまに永遠の意義を感ずるとして、吹き寄せられた貝殻の中に Eternity's music を聴くと述べている。

ハ、感情の海。　種々の感情の意と、それらの具體的な一例として表われる場合とがある。*Salut au Mond!* の

Within me zones, seas, cataracts, plants, volcanoes, groups,

に於ては、それぞれの地理條件によつて象徴される感情を表わすと見られる。多様性をもつ海は

We are seas mingling —— we are two of these cheerful waves,
rolling over each other, and interwetting each other:
(*We two-How Long We were Fool'd*)

に於て、和合の姿で譬えられ、

But as for me, for you, the irresistible sea is to separate us,
As for an hour, carrying us diverse —— yet cannot carry us
diverse for ever;　(*Out of the Rolling Ocean*)

に於ては、一時的ではあるが、二人の仲を隔てる力として、即ち分離の意味に擧げられている。なお

And forward, forword, in solemn darkness,
As if to the sea of lost we go.
(*Sailing the Mississippi at Midnight*)

の忘却の海は、この項よりも寧ろ死の海の項に入れらるべきものと解する。

二、多數量の海。　廣大なる海が、多數多量の意に用いられる事は極めて當然で、

The friend……
Who was not proud of his songs, but of the measureless ocean
of love within him —— and freely pour'd it forth,
(*Recorders Ages Hence*)

But away, at night, as you fly, none looking —— O then the

unloosen'd ocean,

Of tears! tears, tears……

(*Tears*)

With the countless torches lit —— with the silent sea of faces, and the unbared heads,

(*When Lilac Last in the Door Yard Bloom'd*)

Something I cannot see puts upward libidinous prongs

Seas of bright juice suffuse heaven,

(*Walt Whitman*)

等の如く、限りなき愛の海、涙の海、多くの顔、豊かな樹液などの表現に用いられている。

結　　び

Whitman の海の image の全貌を把えようとした爲に勢い分類に追われる形となつた。結論として言い得ることは既に各項に於て述べたのではあるが、一應ここに纒めて見たい。

(1) Whitman の抱く海の image は極めて強く、その詩作の主位的契機を形造つている。

(2) その image の聽覺的側面は、彼の自由詩のリズム形成に決定的な役割を演じている。

(3) 自然の海の解釋には、宗教的な見方が濃い。

(4) 比喩の海は、「いのちの海」と見る場合が最も多く、次に重要なのは「詩の海」の考えである。

(5) 「いのちの海」は、魂の航海する場である。

(6) 「詩の海」は、彼の魂なる「草の葉」の航行する場である。

(7) 船は一般の魂を指す場合と、「草の葉」を表わす場合とがある。

(8) 要するに海は魂の解放される場である。

即ち海は「魂の解放者」(liberator of the soul) としての詩人 Whitman に

とつて、不可缺の活動舞台である。

Whitman は 1888 年即ち彼の 69 才の時、*November Boughs* の序として *A Backward Glance O're Travel'd Roads*「回顧錄」の一文を草した。*Leaves of Grass* 刊行の動機から說き起し、彼獨自の信仰、思想、文学理論を展開している。古い正統詩の型を斥けて、新世界の現實と科学とを基とした民主的な社会にテーマを求め直截平明に歌い上げてこそ、より偉大なる詩が生れるとの所信を明かにしている。併し十九世紀の普通人を記錄すると言いつつも、決して trivialism に隋する事はなく、民主社会の究極の成長は精神的道德的であるべきであるとして、詩文の効用も單に讀者に知的な滿足を與えるだけではなく "to fill him with vigorous and clean manliness, religiousness, and give him *good heart* as a radical possession and habit" と述べて、あくまで善意の昂揚が目指されねばならぬとしている。

要するにこの「回顧錄」は、彼の詩論であり、*Leaves of Grass* についての自らの解說であると同時に、彼自身の思想的自傳でもある。從つて Whitman 解釋には極めて重要な意義をもつているのであるが、その書き出しに於て彼は、*Leaves of Grass* と共に歩んだ苦斗三十餘年の歷程を回顧して "some lengthen'd ship-voyage, wherein more than once the lost hour had apparently arrived, and we seem'd certainly going down —— yet reaching port in a sufficient way through all discomfitures at last" と長い船旅を偲び、苦難を凌いで港へ到達した喜びの意を表わしている。そしてこの文の結びに近く彼はこれまで述べた garrulous talk, thought, reminiscences も

As idly drifting down the ebb,

Such ripples, half-caught voices, echo from the shore.

と、のどかに退き潮に身を任せる老の身の、盡きぬ思い出として讀者に以上の言葉を贈る旨を述べている。

これらの表現は、世俗的な人生航路の譬えを一時的な思い付きから引き合に出したものではない。筆とる指先に滴るほどまでに、海の image を身の一部

としてもつていたに違いないWhitmanの姿が想像されるのである。幼時海洋の轟きを耳にして育つたものは、生涯心の耳に波を聞く。この海のimageは彼の豊かなimageryの中に、恐らく一生を通じて王座的地位を占めていたであろう。そしてこれなくしては「草の葉」の芽生えも困難であつたであろうし、よし成長したとしても全く異つた姿をもつていたに違いない。